

生活科の授業実践における学級通信の有用性

—第1学年担任A先生の事例を通して—

齊藤和貴

(教育学科)

本研究では、学級だよりに掲載された生活科に関する記述の分析及びインタビュー調査を通して、教師が学級だよりを生活科の授業づくりにどのように役立てようとしているのかを分析した。その結果、教師は子どもとともに授業をつくることを大切にするために、授業の中で見取ることのできた子どもの思いや願いを、写真や吹き出しを使って紹介するとともに価値付けたり、教師と子どもの協働によって活動が立ち上がる過程や教師のねらいと見通しを示したりすることによって、保護者や家庭と共有していた。また、生活科の指導経験が浅い教師に共有することによって、生活科の授業づくりの方法的モデルとなってガイダンス機能を果たしていることが分かった。

キーワード：学級通信，生活科，授業実践，保護者

はじめに

1. 問題の所在

1989年の小学校学習指導要領改訂によって誕生した生活科は、4度の改訂を経て現在に至っている。新しい学力観のもと、小学校教育の在り方を大きく変えることを期待されて始まった生活科は、子どもの関心・意欲・態度を重視し、活動や学びを支える教師の支援という指導法を大切にしてきた。また、子どもにとっての身近な環境の中で、具体的な活動や体験とそれらを通した気づき、そしてその気づきを生かし、高め、深める指導の在り方が実践的な課題とされてきた。

その中で、学校現場の教師は、日々の生活科の授業をどのようにつくっているのだろうか。例えば、学校研究や市区町村の教科研究会、公的な研修などの研究授業では、教材や活動方法の工夫、カリキュラムの開発と改善、授業における見取りと評価方法の工夫、個に即した支援の在り方など、授業を構成するさまざまな視点に着目し、検討が進められてきた。その一方で、学級通信が研究や分析の俎上に載ることはなかった。

第1・2学年の子どもを対象とする生活科は、学級担任が指導することが多い。そのた

め、担任が作成・発行する学年だよりや学級だより・学級通信（以下「学級通信」と表記する。ただし、インタビュー調査の中の語りについては「学級だより」をそのまま使用する）に、生活科の内容や活動の様子が掲載されることがある。日本生活科・総合的学習教育学会が編集・執筆した『生活科・総合的学習辞典』の「9. 生活科における保護者・地域との連携」の項目の中には、「保護者との連携では、学年・学級だより、懇談会、連絡帳などで、学習の意図や支援の詳細だけでなく、活動の様子や学習成果などを丁寧に伝えるようにすることが大切である」（p.95）という解説がある（下線筆者）。

実際、生活科の授業実践に関する内容が学級通信に掲載されることが少なくない。しかし、生活科の授業実践が学級通信と関連付けられて分析されたり、研究的な焦点が当てられたりすることは、次章で述べるように必ずしも多くはない。

2. 先行研究

2.1. 学級通信に関する教師と保護者の意識

学級通信とは、学級担任が学級集団の指導のために子どもや保護者向けに発行するものであ

る。理想教育財団のアンケート調査（2016年実施）によれば、小学校教師の77%が学級通信を発行していると回答している。また、その発行頻度は「週1回」が45%、「月1回」が14%、「月2回」が10%、「週2回」が6%である。「毎日」と回答する教師も7%を占めている。このことから、週に1回以上発行している教師は58%にのぼる。また、作成に感じる負担感については、「とても感じる」が8%、「多少感じる」が60%、「あまり感じない」29%、「まったく感じない」3%である（理想教育財団2018）。これらのことから、多少の負担感を感じながらも、そして発行することが義務ではないにもかかわらず、教師が子どもや学級に対する思いを伝え、保護者の理解・協力・信頼関係の形成などに資する学級通信の作成・発行に力を入れていることが分かる。

他方、保護者への調査では、学級通信を「必ず読む」と回答した保護者は81%、学級通信が「必要である」と回答した保護者は90%を占めている。保護者にとって、学級通信が子どもの学校生活や学習に関する重要な情報源であり、期待感が高いことが分かる。

2.2. 学級通信実践に関わる先行研究

学級通信のアイデアや書き方を紹介・解説する書籍は少なくない（上條2009、佐藤2013、堀編2014など）。そして、先に述べたように、学校現場での学級通信作成への意欲は強く、保護者の期待も大きい。しかし、学級通信の作成・発行が授業実践とどのように結びついているのかの研究は思いのほか多くない。例えば、木村（2009）は、総合的な学習において、「子どもの活動課題を記録し共有する方法として、教師と子どもによって編集・発行される学級通信の言語活動」に着目して分析をしている。また、木村（2022）は学級通信を活用した小学校教師の理科の授業実践を通して、小学校のアクティブラーニングの実践的方略について論じている。これらの研究は、ドキュメントデータとしての学級通信を資料として教師の授業実践を分析しようとするもので、分析対象が生活科

ではないものの本研究の分析に方法的示唆を与えてくれる。また、大日方（2023）の学級通信をめぐる教師へのインタビュー調査では、教師間関係の形成に寄与することを指摘している。この点、本研究の生活科の授業実践における学年内の教師間関係、とりわけ、指導経験の浅い若い教師の指導力育成に与える影響を考察する上で示唆に富む。

生活科における学級通信の意義を論じている杵淵は、「学級と家族の間、および諸家族間の、児童＝子どもたちの生活活動と学習活動をめぐる情報交流と、ネット・ワークの形成」（杵淵1997, p.377）において、「学級通信」が有用であることを論じ、「教室の実践に『親も参画してもらおう』上で極めて有力な資源（チャンネル）となる」（杵淵1997, p.386）ことを指摘している。このことは、学級通信が生活科の授業実践に寄与しうることを論証しようとする本研究の問題関心と重なる。しかし、杵淵の研究は理論的な研究であることから、生活科の授業実践について具体的に記述された学級通信を事例とする本研究とは異なっている。

3. 研究の目的と方法

3.1. 研究の目的

本研究は、教師が学級通信で生活科の授業実践の何をどのように保護者に伝えているのかを考察する。それによって、教師が生活科の授業実践や指導の改善に向けて、学級通信をどのように活用しているのかを明らかにすることを目的とする。

3.2. 研究の方法

本研究では、生活科を主たる研究教科として位置付けて授業実践を行っているA先生（公立小学校、30歳代、女性、学年主任）が2022年度に作成した学級通信を事例に、構成や特徴を分析する。また、A先生の生活科の授業や指導に関する考え方や、学級通信の作成意図、生活科との関連性などをより具体的に検討するために、インタビュー調査（半構造化）を実施した。インタビュー調査は、オンライン（実施

日：2024年5月11日，実施時間：70分間）で行った。

また，学級通信の提供及びインタビュー調査に当たっては，学校長並びにA先生に対して学級通信研究目的及び内容について説明し，学級通信の掲載についての同意を得た。その上で，研究成果や研究論文の発表については，成果物を確認していただき了承を得ている。加えて，倫理的配慮として教師及び子どもの名前は仮名で表記し，学級通信の写真部分は加工して掲載する。

4. 調査対象について

4.1. A先生について

2022年度のA先生は第1学年の1組の学級担任であり，学年主任を担っていた。インタビューを実施した2024年度は教職14年目で，2年生の学級担任である。分析対象の学級通信の作成時は教職12年目である。異動歴は2校目であり，現任校では7年目の中堅教師である。また，A先生の教職歴で特徴的なことは，学級担任14回のうち8回が1年生担任であることである。学級通信に関して，A先生はインタビューで教職1年目から「学級だより出したい派」(0:11:19)を自認しており，毎年数多くの学級通信を発行している。なお，(カッコ)内の数字は，インタビュー開始からの時間を示す(以下同じ)。

4.2. 学年構成

次に，学年構成について述べる。

2組のB先生は，20歳代で男性，教職4年目，初めての学級担任である。それ故，初めての1年生の学級担任でもある。ICTを活用した授業づくりに力を入れている。

3組のC先生は，20歳代で女性，教職6年目であり，やはり初めての1年生の担任である。体育科に力を入れて研究を行っている。

4.3. 学級通信の出し方

学級通信は，その名称が端的に示しているように，学級担任が学級の様子を学級の保護者や

子どもに向けて発行する通信・お便りである。しかし，2022年度は，特徴的な出し方をしている。元来，「学級だより出したい派」のA先生であるものの，学級通信の発行に関して，教師経験の浅いB先生とC先生との間に「差」が生まれ，保護者に不安が生じることを回避するために，学年主任として配慮する必要があることを認識していた。なぜなら，B先生もC先生もともに初めての1年生担任であり，とりわけB先生は初めての学級担任でもあることから，学級通信を作成・発行することへの負担を軽減する必要性を強く感じていたのである。そのため，以下のような工夫をしていた。

まず，フォーマットはA4の両面印刷で，毎週末に発行することを基本としていた。その際，表面は学年だよりであり，一週間の予定や学年共通の連絡事項が掲載されている。そして，裏面が学級通信になっている。つまり，学年だよりと学級通信が一体のものとして発行され，配布されているのである。ただし，裏面の学級通信部分は，3人の担任が持ち回りで作成し発行・配布するのである。そのため，それぞれの担任は，3週間に1回学級通信を作成することになる。各担任の学級通信の発行回数も均等で，なおかつ作成回数も抑えることができる。そして，学年全体に配布している。その他，作成した学級通信は管理職，併設されている特別支援学級の教員や学童保育の職員に共有されている。

2022年度は通算44号まで発行され，白黒印刷で子どもを通して配布されている。また，アプリを活用して各家庭にもカラー版を配信しており，それぞれのニーズに応じて印刷したり保存したりすることができるようになっている。

4.4. 分析対象の学級通信

分析対象の学級通信はA先生が作成した学級通信「レッツゴー1組」11号分と，生活科の授業実践と密接に関連する学年だより「えがお」の生活科特別号②である。学級通信は，基本的に裏面1ページであるが，第3号は2ページ，第10号は3ページで構成されている。また，生

活科特別号②は、冬休み前に家庭での活動内容を説明し、家庭の協力を依頼するものであり、5ページで構成されている。

5. A先生の学級通信の特徴

A先生が作成する学級通信は、全体的に写真が多用されるという特徴がある。さらに、後に示す図1～3のように、その写真に付帯する吹き出しによって、授業中の子どもの声やことが示されている。また、具体的な子どもの固有名も数多く登場し、授業における子どもの活動の姿を紹介する記述になっている。さらに、年間を通して、生活科の内容が大半を占めている。

作成に当たっては、A先生は担任する1組の保護者に向けて書くということを前提にしている。そのため、学年全体に配布されているものの、1組の子どもたちや学級の活動の様子が記述されている。このような内容の構成に関して、A先生は以下のように述べている。

(0:20:38) 4月とか5月は、とにかく「学校でみんなが楽しく過ごさせてますよ」と、保護者に安心してほしい。「うちの子、大丈夫ですか?」って聞かれることが結構あるので、「ちゃんとできてますよ」、「安心して過ごさせてますよ」、「居場所をちゃんとつくれますよ」っていうようなところを、まずは発信していきたいな。そこからだんだんゴールデンウィークを挟んで、勉強もだんだん出てくるので、お友達ができたっていうようなところから、お友達とのつながりみたいなのところや、この子がこう言ったらこんなふうな声かけが出てきたよとか、クラスのまとまりから徐々に勉強のことも入れながらっていう感じで意識しています。(下線筆者、以下同様)

このような話からは、A先生は保護者がどのような情報を求め、どのような不安を抱えているのかを保護者目線で捉えながら、学級通信を作成していることが分かる。

A先生が、学級通信についてこのような考え方をもちようになった背景には、1年生の担任

として幼保小連携教育の研究に長年取り組んできたこととともに、以下のような語りから、ご自身の子育て経験が反映されていることが分かる。

(0:19:01) 学校の情報がなかなか保護者に行きにくいなあと思って。幼稚園や保育園だとお迎えがあって、先生が毎日お子さんこうでしたよっていう話が直接できるじゃないですか。今、自分の子どももそうですけど、普段の様子が分からないっていうのが、その保護者の不安感になるだろうなっていうのが結構あります。

6. 学級通信の分析

本章では、A先生が学級通信に、生活科の授業実践をどのように記述し、授業を構成し、子どもの学びや活動を支えているのかについて分析する¹⁾。

6.1. 子どもの活動とよさの発信

先にも触れたように、A先生の学級通信では、子どもの写真とそれに付帯する吹き出しの存在が特徴的である。

例えば、拾い集めたどんぐりで遊んでいる子どもの写真には、「集めたドングリであそんだよ。立つドングリと立たないドングリがあることを見つけたよ。」という吹き出しが付けられている。この時、文末の「見付けたよ」という文言の主語は子ども自身であり、子どものことばとして記述されている。

他方、「Xくんは、葉っぱをつかってシャボン玉に挑戦。少しかたい葉っぱをつかうと、大きくて丈夫なシャボン玉ができることを見付けました。」と記述されている。吹き出しの中に「Xくん」とあるように、A先生がXくんの活動の中の気付き=つぶやき・発話を解説している。それ故、先のどんぐりの事例の「見付けたよ」という子どもの発話型ではなく、「見付けました」という教師の解説型になっている。

このようなどんぐりとシャボン玉の2つの事例からは、写真と吹き出しを使用しているも、

その文章表現は子どもの発話型と教師の解説型の2種類があることが分かる。このことは、同じトピックの中でも使い分けられている。例えば、学校探検の際の記述では、1枚の写真の中に2つの吹き出しが付けられている。そして、下段は「先生たちがお茶を飲むときに使ったり、何か緊急時に使えるようにしてあるんだよ。」と子どもの発話型であるのに対し、上段は「6年生が授業中の図工室も、どんどん探検で突入!!」と教師の解説型である。

このような記述は、遊びや探検という具体的な活動の中で生まれてくる気付きの様相や、子どもの意欲の現れや一人一人のよさを示している。つまり、教師が生活科の活動において何を捉え評価しているのを保護者に伝えている。それによって、教師が子どものどのような姿や学びを期待しているのか、生活科が求める具体的な子ども像を、保護者に理解できるようにしている。子どもは自分の気付きや思いを自覚的にことばとして発し、伝えている場合もあれば、教師が子どもの活動の様子や表情などから見取り、解釈し、推察する必要がある場合もある。子どもは、自分の気付きや思いをすべて言葉にしてくれるというものではない。だからこそ、教師による見取りを解説という方法で記述する必要があるのである。

また、「6年生が授業中の図工室も、どんどん探検で突入!!」という記述は、子どもの気付きではないものの、授業中であるにもかかわらず、「どんどん探検で突入」するほど意欲的で夢中になっていることを、子どものよさとして保護者に伝えている。A先生が生活科の授業において、「このような子どもを育てたい」、「こういう学び方をしてほしい」というメッセージとして、保護者や他の子どもに伝えているものと考えられる。

さらに、子どもの姿を生き生きと保護者に伝える方法として、図1のようなプロトコル型の発話記録も活用されている。ここでは、子どもと校長先生の対話について、A先生のユーモアあふれる解説が紹介されている。授業場面におけるやりとりの中に、子どもの言語理解のお

氷遊びをしていると、出張へ出かける校長先生が!

子：校長先生、氷ができたよ。
 校：すごいね。外が寒いことが分かったね。
 子：うん。すごく、かたいんだよ。
 校：そうかあ。お外が冷蔵庫みたいなんだね。

そう言って、校長先生は出張へ出かけて行きました。すると、「先生、冷蔵庫って氷ができないよね?」と、〇〇くんのナイスなつつこみ!!外は、冷凍庫みたいに寒かったから、氷ができた日の会話でした。

図1

もしろさや言語感覚のよさを読み取ることができる。なおかつ、校長先生であってもツツコミを入れられるあたたかな関係性が伝わってくる。このような場面を伝えられた保護者は、担任や校長先生への信頼を高めるのではないだろうか。

ところで、学級通信には必ずしも子どもの姿とことばだけが記述されるわけではない。冬に「氷ができるかの実験」をした際には、子どもがタブレットPCで撮影した実験結果の氷の写真に掲載している。それは子どもの作品紹介であり、学ぶ姿の解説でもある。この場面では、A先生の「Yくんの氷は、真ん中が凍らないので、2回とも氷のコップになってしまいました。すごくきれいな様子で、みんなが寒さを忘れて見とれていました。」ということばが吹き出しで添えられている。Yくんと「みんな」との関わり合いが生まれ、「見とれて」しまうほどの感情を共有し合っていることを伝えている

のである。このような記述からは、子どもが仲間と協働的に学び合っている様相を具体的にイメージすることができる。

このような子どもの姿を鮮明に伝える学級通信の構成や内容について、A先生はインタビューにおいて以下のように語っていた。

(00:35:28) 会話を中心に入れた方が具体的に保護者に伝わるかなと思っています。生活科って、結構つぶやきって大事じゃないですか。なので、そういうのを拾う意識をしているので、吹き出しが多くなっているのかなって思います。

授業では、つぶやきにこそ子どもの本音や素直な感情が表れる。そのようなつぶやきに耳を傾けることは、子どものよさを捉え、子ども理解を深め、個に応じた指導に繋がる。また、子どもが互いに感情を共有し合うことは、個の活動が多様に展開する生活科において、学級全体の学びのストーリーをつくり、学級の中に一体感を生み出し、学び合いを促す。教室の中で直接子どもの姿を見ることのできない保護者にとっては、A先生の授業づくりや子どもの捉え方を理解する契機となるであろう。

A先生は、以下のようにも語っていた。

(0:56:49) 「先生、ちゃんと見てくれたんだ」、取り上げたことで「先生は僕がやったこと、ちゃんと認めてくれたんだ」というように捉えてくれるのかなあ。「自分のやったことがこうクラスみんなのためになった」っていうのを可視化してくれているんだとか、「ぼくがみんなの役に立ったんだ」っていうようなところにつながっていたらいいなあと思います。

このように、学級通信に掲載され、紹介されることによって、下線部のような子どもの自己効力感や自己有能感が高まることも意図しながら構成していることが分かる。学級通信で紹介されることは、子どもにとってそれ自体がポジティブな評価であり、意欲と自信をもって自分の遊びや生活をよりよくすることに繋がる。また、子どもをつぶさに見取り、よさとして価値

付け発信することは、A先生と子ども、A先生と保護者の間の信頼関係の構築にも大きく寄与するものと考えられる。

そして、

(0:22:15) (保護者に対して：筆者挿入)
「これしてください、あれしてください」っていうような発信ではなく、「子どもがこう頑張ったよ」とか、「子どもがこんなことを考えていますよ」っていうようなところをメインに置きたい。

このように、A先生は「〇〇してください」「〇〇をお願いします」という伝達や依頼ではなく、子どもの学ぶ姿、活動する姿、成長する姿を伝えることに重きを置いていることが分かる。このことは、子どもの意欲や自信、思いや願い、自立した学び手としての有能な姿を家庭に伝えている。また、子どもに対する保護者の捉え方や声かけが変わり、子どもの学びと成長をともに支えていくことができるようにしたいというA先生の願いの現れでもある。

このように、子どもの活動やよさを学級通信で発信することによって、子どもが身に付けた資質や能力を家庭や日常生活の中でも発揮し、「生活化」し、学校と家庭が連携しながら自立への基礎を養うことを期待している。

6.2. 子どもとともに創る授業の可視化

以上のように、子どもの姿を中心に位置付けた学級通信を作成しているA先生であるからこそ、生活科の授業づくりも子どもの思いや願い²⁾を中心に位置付けながら活動を展開することを大切にしている。それ故、活動の見通しが協働的に構築されてくるプロセスも、学級通信の中に掲載されている。このことは、直接的な子どもの姿というよりも、A先生の指導方法や授業づくりのあり方を示している。

図2は、季節単元「ふゆとあそぼう」の活動が立ち上がってくる時の様子を記述している。冬の遊びについて子どもたちにアンケートをとり、学級での話し合いを経て、これからの活動の見通しを立て、最終的な学習のゴールが

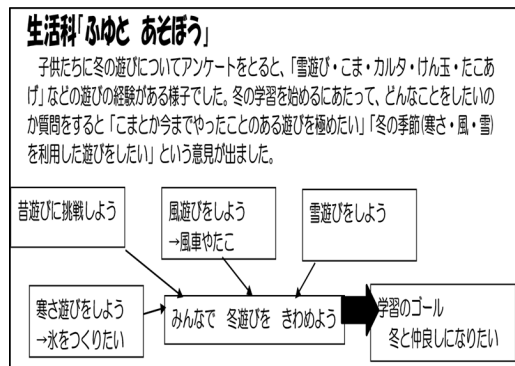


図2

「冬と仲良しになりたい」ということにあることがチャート式に示されている。このような記述は、生活科の活動が、子どもの思いや願いの実現にあり、そのような授業づくりを大切にしようとするA先生の授業観を保護者に理解させることを可能にしている。

図3は、飼育単元「いきものとなかよし」の学級通信（10月7日）である。ここでは、9月15日の板書が写真で示され、ここに至るまでの活動の立ち上げや活動の経過を振り返っている。板書の写真の左側には、「ぜんぶやりたい」という子どもの思いや願いが書かれている。学級通信の本文には、「なかよし」ということばのイメージから話し合いを展開し、学習のゴール

図3

ルの決定へと至る経過が解説され、子どもの思いや願いに基づいた活動が展開されてきたことが詳しく綴られている。このように、単元の展開が、さまざまな形式で可視化され、子どもの思いや願いを実現していく学習過程が工夫して示され、授業を物語化して伝えている。

さらに、子どもの思いや願いの可視化は、単元の展開計画に関わる場面だけに限られてはいない。子どもの写真と吹き出しによっても示されている。「広い公園だから、思い切り走る遊びがしたいな。」「今までやったことのない遊びもやってみたいよね。」というように、「～したい」「～やってみよう」という主体的な学び手としての子どもの姿が数多く紹介されている。A先生が、子どもが主体的に活動を見出し、個々の思いや願いを学びの文脈に結びつけながら実現していく学び方を大切にしている授業観や指導観をもっていることが分かる。

また、単元の計画段階を掲載することは、読み手である保護者にとっても別の意味で重要になる。A先生は、インタビューで以下のように語っていた。

（1:03:14）計画段階を載せるのは結構意図していて、保護者に手伝ってもらおうことが多々あるっていうか、道具の準備もそうですし、おうちでの声かけも結構あったりするの、子どもたちこんなこと考えていて、こんなことやりたいと思っていますっていうのは、あえて入れるようにしている。終末のところがありませんのは、学習カード持ち帰るので、それぞれの子によって気付きとか発見は違うので、学習カードで見てもらおうかなと思っています。

生活科では、家庭で事前に道具などの準備をしてもらうことが少なくない。また、家庭と連携しながら、保護者にも教師と同じねらいや意図をもって声掛けしてもらうことが、子どもの意欲や自信に繋がる。学級通信の構成や内容が、生活科の授業実践をよりよくするために意図的に関連付けられていることが分かる。

6.3. 家庭での活動を支える保護者への依頼

図4～6は、家族単元「ありがとうがいっぱい」の際に、冬休みの課題として取り組む家庭の仕事の手伝いを支えるために、A先生が作成した生活科特別号②の一部である。家族単元では、家庭での活動が必要不可欠になるため、保護者のために学習のねらいや家庭学習の予定、依頼事項が詳しく説明されている。例えば、図4のような「実施にあたってのお願い」が示され、子どもが「提案した活動は、可能な範囲でさせてあげてください」という依頼がなされている。また、「お手伝いだけでなく、自分のことを自分でできるようになったら、それも称賛

してあげてください」とあり、子どものよさを認め、意欲と自信を高められるように、保護者の子どもへの関わり方が示されている。

また、図5には、子どもたちが取り組むワークシートが示されている。その中で、活動のねらいが明示され、カードの見方や書き方が例示されている。吹き出しの中には、保護者に対して、「ごはんを残さず食べてくれると嬉しいよ。『おはよう』の挨拶を元気に言ってくると、元気が出るよ。『ありがとう』って言われると嬉しいよ、なども伝えていただけるとありがたいです。」と示されている。教師が直接的に介入することのできない家庭での活動において、保護者に教師のような支援者としての役割を担ってもらえるように具体的な声のかけ方を例示し、家庭での活動がよりよいものになるように働きかけている。子どもへの支援は直接的なものだけでなく、子どもの活動を支える保護者に教師のような役割を担ってもらうという形でも行われている。

このことは、以下のような事例において、さらに明確に捉えることができる。本単元の第3

【実施にあたってのお願い】

☆お子さんへのメッセージをお願いします。

☆お子さんが提案した活動は、可能な範囲でさせてあげてください。

☆すでに決まって、家庭でやっているお手伝いなどは、それを続けていただいても構いません。

☆危険をとまなう作業(アイロンかけや調理などは、保護者の方が必ずそばにつき添ってください。

☆お手伝いだけでなく、自分のことを自分でできるようになったら、それも称賛してあげてください。

図4

家庭学習での御協力内容

☆ワークシートの書き方は、子供たちに伝えますが、以下を参考にしながら取材に応じていただき、メモのお手伝いをお願い致します。

◎ 第2時「家族の仕事調べ」
ねらい：家族の観察やインタビューを通して、家族の温かさや大切さに気付かせる。

ありがとうが いっぱい②(記入例)

かぞくのしごとを しらべてみよう!! だれが?

いえのしごと	だれが?
あさごはん	おかあさん
せんたく	おかあさん
ペットのさんぽ・ごはん	おとうさん
きょうだいのせわ	おねえちゃん
そうじ	おばあちゃん
さらあらい	おとうさん
かいしゃのしごと	おとうさん・おかあさん

以下のようなプリントを持ち帰ります。この他に、「習い事の送り迎えや自分たちの宿題チェック、買い物、トイレ掃除、靴(上履き)洗い」なども家の仕事になります。迷った場合は、とりあえず記録をさせていただければと思います。

また、スクープの場所は、この後、自分もできることをやってみる活動へとつながりますので、「宿題を丁寧になってくれると嬉しいな」「朝は忙しいから一人で起きて支度ができるといいな」「お風呂洗いは、大変だな」など、お子さんに伝えてください。

スクープ!

おうちの人が、はなしていたことや 見ている 気づいたこと おもったことを メモしましょう。

おべんとうとあさごはんづくりがたいへん。あさはやくおきないといけないから。かぞくのせんたくものがおおくて たたむのがたいへん。わたしもつたってみようかな。おとうさんは、いえでもかいしゃのしごとをしていた。おふるがまい白きれいできもちがいい。

ごはんを残さず食べてくれると嬉しいよ。「おはよう」の挨拶を元気に言ってくると、元気が出るよ「ありがとう」って言われると嬉しいよ、なども伝えていただけるとありがたいです。

図5

☆御家庭で、こんな言葉かけやつぶやきを！！

*お買い物で「この(食材)は、みんなが好きだよね」
「これを入れると、美味しくなるんだよ(隠し味)」

*調理で「食べやすいように大きさをそろえているんだよ」
「誰が苦手だから、細かく切っているんだよ」
「家族の好みに合わせて、お鍋を別にして味付けをしているよ」

*盛り付けで
「いろいろがきれいだと、家族のみんながたくさん食べてくれるよ」
「食べやすさを考えて、一人一人のお皿を変えているよ」

図6

時の授業では、「家族がどんな思いで家庭の仕事をしているのかを調べる」活動によって、「カレーライス作りを通して、家族のみんなのことを思って食事作りをしていることに気付かせる」ことをねらいにしていた。家族単位では、各家庭での個別の活動になるため、教室での授業において、子どもたちが共通の話題をもてるように冬休み中にカレーライス作りを共同体験にすることができるように各家庭に依頼しているのである。その際に、図6のように、「買い物」場面、「調理」場面、「盛り付け」場面を例にしながら、保護者に「言葉かけやつぶやき」を例示することで、家庭での仕事の配慮の仕方を示し、子どもにとっての学びのキーワードとなることねらっている。そして、子どもの気付きを促し、ワークシートに記述する振り返りや3学期の授業で行う話し合いに生かされることを意図しているのである。

7. 総合考察

以上のような構成や内容をもった学級通信が、生活科の授業実践において、どのような意味や役割をもつことになるのであろうか。

7.1. 学び合う学級集団の形成

碓井が「学級通信は教育活動の『補助具』であるが、ときには、その主体以上の働きをして、新たな学級・教室像をつくりだす」(碓井1992, p.9)と言うように、A先生の学級でも興味深い事実が生まれている。

A先生は、インタビューの中で以下のようなエピソードを語っていた。

(0:58:04)「先生、あの子、いいことしていたから載っけてあげた方がいいよ」と言われたことがあります。「先生、知ってる？あの子がね、こんなことしてすごくなって、ばく思ったんだよ」と言って、「それ、みんなに言ってあげた方がいいから、載っけてあげた方がいいよ」ということがあります。

下線部のような子どもの発話から分かることは、子どもが生活科の活動の中で互いのよさを認め合い、その価値に気付き、学び合っているということである。このことは、子どもが学びを深めることと学び合う関係性の構築を同時に行い、かつ、学級通信がその契機となっているということの意味する。学級通信の中で、A先生が子どもの姿に対して生活科としての価値付けを行うように、子どもも仲間の学びに対して受容的で肯定的に向き合っている。そして、あたたかく学び合う学級集団の形成に繋がっている³⁾。

小坂・赤坂は、学級通信を発行する意義として、「保護者との連携」「子どもとの信頼関係」「教師としての資質向上」に加えて、「子ども同士の信頼関係」の形成が起こることを指摘している(小坂・赤坂2018, p.21)。上の場面は、学級における子ども相互の信頼関係の形成につながるものであり、生活科の授業実践のみならず、学級経営としても重要な意味をもつ。

7.2. カリキュラム・マネジメントの説明責任

生活科の単元構成では、子どもの思いや願いを大切にすることや、生活科を核にした教科等横断的な学びが鍵になる。幼稚園や保育園での遊びを通した学び方を生かすためには、小学校での学び方を合科的・関連的に扱い、総合的に展開するマネジメントが求められる。A先生の学級通信には、そのような「生活科×他教科等・行事」のトピックが何度となく掲載されている。このことは、先に述べた「子どもとともに創る授業の可視化」と密接に関連している。

例えば、算数の「数の構成」の学習では、秋に採取したあさがおの種を10個ずつビニール袋

に入れて数えるという活動が紹介されている。インタビューでは以下のように語っている。

(0:29:48) タンポポの時は春だったので、数の勉強につなげました。タンポポの花を摘んできた子がいて、「いくつあるんだろうね」みたいにやったりだとか、どんぐりのときには繰り上がりで10より大きい数の足し算と、引き算になってくるので、どんぐり使ってみなでいっぱい拾ってきて、「いくつあるかね?」とやってみたり。あと、100より大きい数で10のまとまりで数えるのに、あさがおの種を使ったかな。

季節を通じて、生活科における子どもの活動の中に算数的活動の契機を見付け、教材にしていることが分かる。

また、入学したばかりの「1年生を迎える会」の記述でも、2年生からもらった「〇〇小パンフレット」のプレゼントを教室で読んだ際、「給食でアイスクリームが出るよ」「自然園にはいろいろな生き物がいるよ」といった情報を知った子どもたちが、「自分たちも学校のすてきなところをもっと知りたい」という願いをもち、学校探検の計画を立てたことが記述されている。そして、「自分たちも、学校探検のまとめをパンフレットにして、来年の1年生に渡したいという意見も出ました。今後が楽しみです。」というA先生のことばが、吹き出しで添えられている。

このような子どもの生活と授業を一連の学びの文脈として結びつけた授業実践を、学級通信で紹介することは、カリキュラム・マネジメントをめぐる保護者への説明責任を果たす機会となっている。

7.3. 保護者の生活科理解の促進

保護者にとって、生活科の目標や内容、学習方法の理解は思いの外難しい。教科書があっても、実際の指導内容や方法は、学校や地域の実態によって大きく異なる。子どもの思いや願いに基づいて単元構成をすればするほど、教科書との差異も大きくなる。そのため、写真や吹き

生活科「ありがとうがいっぱい」

生活科では、「ありがとうがいっぱい」という学習が始まります。この学習は、自分の生活を振り返り、家族の人が自分たちのために家の仕事(洗濯・掃除・食事等)をしていていることに気付かせ、自分も家族のためにできることをやっという気持ち育てる学習です。また、自分の成長(自分のことを自分でできるようになること)が家族の喜びにつながることに気付かせる学習をします。この学習を通して、規則正しい生活を送ったり、家庭(家族)の温かさ(に)気付いたりすることができるようになることをねらいとしています。

図7

出しによる子どもの姿や学び方の紹介、チャートによる単元展開の図示、板書記録などは、授業の様子や子どものよさを紹介することとは別の意味をもつことになる。つまり、読み手である保護者の生活科理解を図ることに寄与する。

A先生の学級通信からは、活動の中の子どもの気付きが記述され、活動を通して生まれる思いや願いが単元を動かす原動力となり、展開されていく過程が示されている。また、先述した図5の「家族の観察やインタビューを通して、家族の温かさや大切さに気付かせる」や図7の「この学習を通して、規則正しい生活を送ったり、家庭(家族)の温かさ(に)気付いたりすることができるようになることをねらいとしています」のように、単元の目標が端的に示されている場合もある。つまり、読み手である保護者が、生活科という教科のねらいや学び方を理解することにも寄与している。

上條は、学級通信には「事務連絡型」「教室日記型」「相互対話型」3つのタイプがあると指摘している(上條2009)。しかし、A先生の学級通信からは、生活科のねらいや内容、子どもの学び方を発信することによって、教育活動への理解や協力を図ること以上に、保護者の教科内容や指導法の理解を図る「教科内容啓発型」という面があると考えられる。

8. その他に見られた学級通信の役割

8.1. 保護者の安心感の醸成

保護者にとっての不安は、第5章で論じたような小学校に入学したばかりの1年生の保護者が抱く学校の情報不足に由来するものだけでは

ない。学年担任間の経験差による授業内容や学習進度の差から引き起こされるものもある。その点、各学級の学級通信が学年だよりとともに学年全体に配布され、共有されることによって、保護者の不安が解消されるというメリットが生まれていることが分かる。

(0:16:24)「各クラスの学級だよりが裏に印刷されてくるのってどうですかね？」みたいな話をしたときに、一年生の保護者ならではかもしれないのですが、「1年1組がベテランで2組・3組が1年生の経験がないので、保護者が1組でも同じことをしているのだとか、2組も同じようなことしているのだと分かって安心します」と言っていました。(中略)「どのクラスも同じように指導してくれているっていうのが伝わるのは安心します」っていうのを聞いたことがあります。

このような語りからは、不安の解消という対処的な意味ではなく、より積極的に保護者の安心感の醸成に繋がっているということが分かる。

8.2. 若い教師へのガイダンス機能

生活科は、他教科に比べて学年合同で活動することが多い。学校探検やまち探検、公園や野原での校外活動など、さまざまな場面で学級を越えて学年単位で活動することがある。そのため、学年内で活動内容や活動時期、活動場所や方法などを調整し、担任相互の共通理解を図る必要が生まれる。しかし、今回の事例のように1年生の担任経験が豊かなA先生とはじめて1年生を担当するB先生とC先生が学年を組む場合、単元計画の作成や授業づくり、見取りや支援といった具体的な指導の違いや進度の差が生じることがある。そのため、このような差異をどのように埋めながら、学年として指導していくかが授業実践上・学年経営上大きな課題となる。

これまで論じてきたように、A先生の学級通信には、単元の導入における学習対象との出会わせ方、学習計画のつくり方、活動の展開方法、板書の仕方、子どもの見方や評価の視点な

ど、A先生の具体的な生活科の指導方法が示されている。とりわけ、具体的な子どもの活動の姿やことばが示されることによって、生活科特有の気付きや学び方、低学年の子どものらしい発想などが映し出されている。そのため、B先生やC先生にとっては、方法的モデルとしてのA先生の学級通信から、生活科の授業実践を間近で学ぶ契機となっているものと考えられる。

A先生は学級通信の内容について、B先生やC先生から質問されることがあり、実際の生活科の授業の中で、以下のような助言をした経験があると語っていた。

(0:52:43) (授業の中で一筆者挿入) 一緒に外に出ながら、「あの子、今、こんな発言していたから、こういうのいいよ」とぼそぼそと言ったり、「これは次の学級だよりに載せられそうだよ」とか、「あの写真撮っておくといいよ」というのはありますね。

そして、B先生とC先生の学級通信の書き方の変容について、A先生は以下のように語っていた。

(0:55:16) 年度当初は、あった事実だけパツパツと書いているというか、どっちかっていうと先生目線で書いていたのが、だんだん子ども目線で書いてくれているなっていう印象はあります。子どもをじっくり見ようっていう意識にもなってくるのかなって思いますね。

下線部のような変化は、若い二人の教師が、授業の中で子どもの思いや願いに寄り添い、子ども理解に努めながら授業実践する教師へ成長していく姿と捉えることができる。A先生も、B先生とC先生の子どもの見方、見取り方が深まってきているという認識をもっているのである。つまり、学級通信を媒介にして、A先生が若い教師の指導力を育成し、教師としての成長を促しているものと考えることができる。このことは、個々の教師の指導力の向上に寄与するのみならず、結果的に学年としての生活科の指導力の向上を導き、子どもの学びの充実へと還元されることにもなる。

9. 今後の課題

本論者は、単年度の学級通信とそれに関係するインタビュー調査の分析であった。しかも、各担任の経験差から、学年だよりと学級通信を一体化し、各担任が順番に作成するという方法を採用していた。そのため、「学級だより出したい派」のA先生にとっては、一定の制約を負った学級通信をめぐる実践であった。そのため、分析対象とする学級通信の数が少ないという限界がある。しかし、インタビュー調査を通して、A先生の授業観や指導観と密接に関連し合っていることを確かめることができた。

今後は、分析の精度をさらに高めるために、A先生の他年度の学級通信との比較・分析を行うことや、B先生・C先生にとってのA先生の学級通信の意味を調査することが課題である。

註

- 1) お迎えのたびに保護者と顔を合わせて話をする機会があったり、連絡帳を通して日々の詳細な子どもの様子や生活が伝えられたりしている幼稚園や保育園と異なり、小学校では子どもの学校生活の様子に関する情報量が圧倒的に減少する。そのため、保護者が不安に感じる 경우가少なくない。保幼小接続期における架け橋プログラムやスタートカリキュラムの重要性が指摘される中、学級通信には、このような保護者の不安を解消するツールとしての役割が期待されている。
- 2) 今次の小学校学習指導要領の改訂に伴う解説において、生活科では「思いや願い」という文言が64回登場する。それ故、生活科が子どもの思いや願いの実現を重視し強調されていることが分かる。生活科の授業づくりにおいて、子どもの思いや願いに基づくことは、重要な指導原理となる。
- 3) 鈴木は、教師への調査から、学級通信によって「友達のよさを認め合う雰囲気が醸成されたり、自己肯定感の高まりにつながったり、教師の教育観の浸透により、子どもの言動に変容が表れたりする等、学級経営の充実到手応えを感じている」(鈴木2012, p.105) ことを指摘している。

参考文献・引用文献

- ・学校における各種通信の実態と教育効果に関する調査研究会(2018)『学校における各種通信の実態と教育効果に関する調査研究最終報告書』公益財団法人理想教育財団。
- ・碓井 岑夫(1992)「教育的メッセージとしての学級通信」教育科学学会編『教育』42(13), pp.6-14.
- ・大日方真史(2023)「学級通信実践の今日的意義—ある初任期教師に対するインタビュー調査をもとに—」三重大学教育学部研究紀要74(2), pp.133-147.
- ・上條晴夫(2009)『小学校もらってうれしい!学級通信のつくり方アイデア30』ぎょうせい。
- ・柘淵俊夫(1997)「児童は、現実生活の『生の素材』を、共同の『話し合い』の下で取り扱っているか—『生活科』の学習活動が成り立つための、二つの要件(その3)」上越教育大学研究紀要16(2), pp.365-388.
- ・木村学(2009)「子どもの探究活動へと繋がる言語活動の実践的研究—大楽光明教諭による学級通信の分析を手がかりに—」日本生活科・総合的学習教育学会誌「せいかつか&そうごう」第16号, pp.78-85.
- ・木村学(2022)「小学校におけるアクティブラーニングの実践的研究—学級通信を媒体とする教授活動を焦点に—」文教学院大学人間学部研究紀要(23), pp.23-33.
- ・小坂篤史・赤坂真二(2018)「学級通信を介した友人関係の深まりに関する事例的研究—児童の良さを伝える学級通信に着目して—」上越教育大学教職大学院研究紀要(5), pp.13-22.
- ・佐藤正寿(2013)『思わず発行したくなる学級通信のアイデア40』フォーラムA企画。
- ・鈴木健二(2012)「学級経営における学級通信の役割」愛知教育大学教育創造開発機構紀要(2), pp.103-111.
- ・日本生活科・総合的学習教育学会編(2020)『生活科・総合的学習事典』溪水社。
- ・堀裕嗣編・「THE教師力」編集委員会(2014)『THE学級通信』明治図書。

謝辞

本研究のために、公務忙しい中、長時間にわたるインタビューにご快諾いただき、貴重な学級だよりを提供してくださったA先生に心よりお礼申し上げます。